

1 研究の内容

子どもたちがやりたい音楽とは何だろうと常に考えながら実践を続けてきている。そして、異なる背景を持った個が同じ空間で集団として音楽すること、これこそが学校音楽でしか経験することのできない学びの時間なのであろうと信じ、研究を続けている。さらには、子ども一人ひとりを丁寧に見とることから学校という場での音楽の価値を一層高めたいと強く感じている。それぞれがもつ音楽が存在し、繰り返される音楽活動の中で、異なった表現が行き交う空間がそこにはある。だからこそ触発されながらそのカタチを大きくしていく。これは子どもの活動する姿を多角的に分析した過去の研究からも明らかになっている。その中でも、自分で音楽活動を計画し、見通しを持って創っていく時間をたっぷりと設定する環境下で、子どもたちの音楽的深まりだけでなくひろがりもみられた。自らが自分の意思で音楽と向き合い、自分がやりたい音楽をみつけ、さらなる興味を持つことから深まり、ひろがっていったのである。まずは自分が音楽することを楽しむ。時に仲間とともに創りあげる過程を楽しんだり、悩んだりする中で新しい気づきが生まれ次に活かしていく。このような学びのサイクルこそ、学校音楽における大切な学びであると言えるのではないか。

以上のような試論の背景には、長年にわたり本校音楽部は、ニュージーランド出身のクリストファー・スモールが提唱した、「musicking」*¹に賛同している事も申し添えておきたい。その中で、どんな形であれ音楽に主体的に関わっていくことができるからだを育むことを第一に考え実践している。子ども一人ひとりが「音楽すること」を実感し、自らが音楽と向き合いたいと思えるような環境づくり（場の設定や教材の工夫）が大切であることも明らかになってきた。その特徴のひとつといえる活動が、4年生から継続して設定している「Music Map」である。やらさせる音楽ではなく、自らがやる音楽の時間が保証されている中で、自分なりに活動計画をし、自分や他者の音楽に浸る中で、自分と音楽との向き合い方を更新し続けている子どもたちの姿が多く見られている。今までの実践で、子どもたちの音楽と向き合う姿の変容を分析し直す中で、この実践の価値付けができた。子どもたちの音楽に関わる姿勢や変容から省察するだけでなく、音楽をあみ直していく過程こそ大事であることも再認識できた。

昨年度から「やる音楽」という新テーマのもと、子どもたちの更なる音楽的な深まりを保証してきた中で、昨年度は、自ら音楽活動に関われるような環境設定や材の追究を中心に、子どもの省察も交えながら意味づけていった。様々な文化を一人ひとりが教室空間に持ち込み、さらには、新たな文化となって個々に蓄積されていく様子も伺えた。教師もともに音楽することを楽しみ、自分の文化も子どもとともに蓄積できた。一方で、個々の変容をリアルタイムで追うことが難しいことも明らかになりつつあった。新たな子どもの見とり方についても合わせて、今年度の課題として考えた。後述の子ども姿も参照されたい。

2 カリキュラムの特徴（本校のカリキュラムは、帯単元で展開している）

1・2年生では、からだを使って、音楽することに重点をおいている。特に1年生の入学当初は、幼児教育からのなめらかな接続を目指すべく活動に重点を置いている。その一つが、わらべうたあそびである。子どもたちは、初めて出会う仲間と、手を取り合い、ともに歌い、活動を成立させようとするのである。たった数分でも、子どもたちの中には、様々なことが起き、それを子どもたち同士で解決しようとしていく。「あそび」という活動の中に、音楽の授業を位置づけ、音楽的要素も取り入れている。また、歌集「歌はともだち」（教育芸術社）の中から自分で選んだ曲をクラス全体で歌う活動も常時活動に位置づけている。

2・3年生では、和楽器に触れる機会も設け、多様なモノに出会う機会を多く設定している。2年生では、江戸囃子を唱歌から体験し、締太鼓、桶胴太鼓、篠笛とアンサンブルを楽しむ。3年生になると大太鼓や箏との出会いもある。また、ソプラノリコーダーとの出会いもある。自分息がそのまま音となって表れる楽器の一つであり、自分の身体から出てくる息を感じられるよう配慮している。あ

そびの延長線上に位置するよう、楽曲選択にも配慮している。

4年生から6年生では、自分たちで音楽活動を計画し、実行していく「Music Map」の時間がある。

「Music Map」は年間を通して継続・活動していくものである。この学習の大きな特徴は、活動を自らが設計し、進めていくところにある。従って、扱う楽曲や表現方法も個に委ねられている。また、活動するメンバーも一人から数人のグループと多岐に渡り、集団構成も流動的である。この活動では、子どもが自分で音楽活動を運営していく。様々な音楽が混在する教室空間で、インスピレーションを得て、アイデアを思い描き、行動計画を設計し、進歩について振り返り、自己もしくは他者からのアドバイスを受けとめ、ひとつのタームを完了させていく。調査し、探求し、作品（演奏）を創造し、見直し、修正を繰り返したのちに、完了のタイミングとその成功度のある程度判断する。また、子どもたちは、自分なりの探求の道筋に沿って、学んだことを自分のものにしていく。作品（演奏）に深くかわり、創造性の拡散的な思考過程と収束的な思考過程を示し、問題に対する解決方法を自立的に発明する。



このような学習の繰り返しから、音楽的要素の習得や表現の自由さを認識し、次なる活動へとつなげている姿が多く見られている。個では味わえない、集団で活動している学校音楽だからこそその醍醐味でもある。常に音がある環境で仲間とともに活動することから、自己や作品（演奏）をメタ的に捉える力を自然と身に付けていくと捉えている。同時に、音楽を通して、音楽における認知的スキルと、社会情動的スキルを交錯させながら複合的に習得していくと考えている。

以上の活動に加え、一斉活動として器楽演奏（リコーダーを中心とした）や歌唱活動も行う。仲間と息をあわせるおもしろさや心地よさを感じる機会になるだけでなく、音の重なり気づく機会になることも多い。自分で音楽と向き合う時間、集団で一つの音楽を奏でる時間を、音楽フィールドに共生させていることが、自ら音楽に関わることで、まさに「やる音楽」につながっていると捉えている。

また、11月に行われる全校音楽会に向けた取り組みにおいて、学年で一つの音楽をつくりあげていく過程においても、音楽に限らない実に大きな学びあいの時間がある。一人ではできない、集団だからこそ経験できる大きな音楽活動の一つと言えるのではないかな。

現在の音楽において、五線譜が大きなウェイトを占めていると言っても過言ではないだろう。しかし、この五線譜に壁を感じている子どもは多いのが現実である。五線譜の読譜ができないう音楽ができないのかと問われたら答えはノーである。例えば、インターネット上には、様々な楽曲のシンセシア動画がアップロードされている。それらをうまく活用し、自分のやってみたい音楽にアプローチすることもできる。また、実際に表現してみたい楽曲に出会ったとき、実際の演奏動画を視聴し自分の音楽につなげることもできる。ゆっくりではあるが、徐々に自分のものとしていく姿がある。音というカタチにアプローチしていくすべは多様にあるのだという教師の寛容さも大切にしたい。

3 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

（1）からだをつかって音楽する重要性（低学年）

低学年では、からだ全体で活動することを大切にしている。あそぶという活動を通して、様々なことを学んでいく。低学年の時に、からだを通して経験していると、高学年においての多様な音楽を受け入れたり、自分との異なりを受け入れたり、音楽そのものを柔軟に受け入れることが出来るからだに育つのである。幼児期からの体験を断ち切ることなく、活動を工夫している。

① 自分で選んだ曲をみんなで歌う活動

授業の始まりは、1グループ（4人）それぞれの子が歌集「歌はともだち」（教育芸術社）の中から歌いたい曲を選び、クラスみんなで歌う。その際、選んだ理由もクラス全体で共有するようにしている。活動を重ねるにつれ、その子らしさや選んだ背景までも感じ取ることができるようだ。毎回こだわりを持って曲を選ぶ子もいる。それをわかっている仲間もいる。自分で選ぶという行為には、様々なことが関係していることがみてとれる一場面である。その子自身を受け入れられる関係性が出てきていると言ってもよいだろう。もちろん初めて出会う曲もある。そのような時、友だちの声を聴いて真似たり、楽譜を一生懸命見つめ、時には指で歌集をなぞりながら歌ったりする姿がある。仲間が

いるからこそ、成り立つ学びと言えよう。

② あそびを通して関係性が育まれていく

入学して間もない時期の活動では、初めて出会う仲間と、手を取り合い、楽しそうにあそぶ姿もある一方で、新しい環境への不安を顔に出す子も少なくない。いざ一緒にあそび始めると、手をつなぐ安心感もあるのか、すぐに活動に参加できる。仲間とともに、声を合わせ、息を合わせ、うまくあそびが成立したとき、子どもの表情は非常に柔らかく、心地よさがみてとれる。子どもたちにとっては、わらべうたあそびだけがあそびではない。手拍子でのリズム学習や、オスティナートを付けて歌うこと等々、すべての活動が子どもにとってはあそびとしてからだに入っている。

わらべうたあそびでは、クラス全体であそべるものから始め、徐々にグループでのあそびや少人数のあそび、人当てのあそびも取り入れていく。活動を重ねるなかで、息があわなかったり、ルールを守ることができなかったりなど、当然もめ事も頻発するが、そのときの子どもたちの関わり合いこそが大切であると考え活動を見守っている。同時に、そのような営みの中で葛藤を覚え、折り合いをつけることなどを学んでいるのである。他者がいることを意識する上では、大切な経験と言えるだろう。

2年生でもわらべうたあそびは継続している。あそびを継続する中で、次第に自分たちであそびを変えて楽しむ姿も出てくる。時に、子どもたちは、言葉を変えてあそんだり、フレーズを増やしてあそんだりもする。伝承あそびだからこそその現在を生きる子どもたちにあったあそびのあり方も見えてきている。時代を超えた伝承あそびとして、変化を楽しみながら活動させたい。

(2) Music Map の時間における学びあい

●再現したい曲を自分たちのものにしていく姿



活動するメンバーも、再現したい楽曲も流動的であるこの活動であるが、同じ目標に向けて取り組む姿は多種多様にある。ここで紹介するグループは6年生の男女8名が交ざっているグループである。8名が異なる音楽経験を持っており、技術的な力量も異なる。リーダー的な子はいるが、互いに最終的な理想を語り合い、次第に形にしていった。その過程では、教え合うことや、隣で演奏している様子をじっと見ながら習得していく姿もあった。「ここは、少し間を空けよう。」「ここでの演奏する楽器はマリンバとピアノだけ

にしよう。」「キーボードの音色はこれがいいかな。」などと、音楽的要素を含めた相談がなされていた。ある程度形になってくると、修正が始まった。「なんか、メロディが聞こえてこないんじゃない?」「なんかガチャガチャしている。」「ドラムのリズムを変えてみよう。」などのやりとりがなされ、自分たちのやりたい音楽へと変化させていったのである。

●動画を参考にしながら習得していく姿

6年生になると、ドラムセットに触れることができる。毎年6年生が叩いている様子を見ている児童は多く、憧れをもっている児童が多い。しかし、いざ演奏してみるとうまく体が動かない。聴いていたリズムはイメージできているが、そのイメージとからだリンクしていないのだ。インターネット上のドラムを演奏する動画をじっとみつめ、真剣に見て試していたA児。少しずつではあるが、見て叩いてを繰り返す中で、リズムを刻めるようになっていった。そして、2学期に入ると、基本的なリズムを叩けるようになっていった。リズムが叩けるようになると、周りのグループからも声がかかり、セッションを始めた。遠目に見ていたB児は、合間を見つけてドラムに触り始めた。B児も動画を参考にはしていたが、A児が叩く様子から自分の物にしていった様子がうかがえた。このように、そこから広がる学びの空間が大切なのである。教師が一方的に教え込む技術ではなく、子どもたち同士で高めあい、習得していく技術の方が生きた技術として子どもたちのからだに残るのだ。

（３）全校音楽会に向けた取り組み

11月の音楽会に向けて9月終わりから練習が始まった。ここでは6年生の姿を紹介する。最高学年として迎える音楽会。子どもたちは、自分たちが1年生だった時の6年生の姿に憧れをもっていた。自分たちもああなりたい、という気持ちが溢れていたように振り返る。合奏は様々な楽器を用いた編曲になっている。それぞれ演奏できる人数が限られているため、希望が全



員叶うわけではない環境である。時間を見つけては、自分たちで音楽室に集まり、互いに教えながら練習をしていた。マリンバ希望のC児（男児）は読譜ができず、苦戦していた。そこにD児（女児）が寄り添い、教えてあげるといふ微笑ましい姿があった。C児は少しずつ、本当に少しずつマスターし、冒頭の部分だけではあったが、演奏することができるようになった。自分のことだけでなく、周りを意識しながら音楽していた一場面であろう。個人の音楽ではなく、集団としての音楽が現れた時間であったと捉えている。

音楽会を通して、上級生の演奏する姿に憧れ、新たな音楽と向き合おうとする姿も多い。音楽会後の初めての授業で5年生が6年生の楽譜をもらえませんかと尋ねてきた。「どうして？」と聞くと、「ぼくもああなりたいと思って。」この発言からは来年はあんな風になりたいという憧れだけではなく、自分から音楽に向き合おうとする、まさに「やる音楽」と言える一場面であったと言えよう。

4 今後に向けて

新たなテーマを設定して実践研究を始めて2年目になる。そして今年度は昨年度以上に子どもに活動を委ねる場を多く設定してきた。教師のパフォーマンス的関わりは一切行わず、その中で、子ども自身が音楽することを楽しむ姿や他者との協働から新しいものに出会うことを大切にしたい。

同時に、評価についても考えてきた。しかし、誰のための評価なのか。文字化することが評価と言えるのか。単なる教師が視覚的にわかりやすいから記述させているだけになっていないか。など、様々な疑問も生じてきた。この点については、慎重に考え続けていかねばならないだろう。

長谷川は、次のような試論をまとめている。私たちが生きる社会には、西洋音楽および西洋音楽的なポピュラーミュージックが溢れている。そして、資本主義社会の中で大量生産される西洋音楽とそれへの単純接触効果により、そのような音楽における「慣例的概念」が音楽全般の「良さや美しさ」の元締めかのような価値観が私たちの世界には不可避免的に広まっている。（中略）音楽科は、そのような他律的な音楽観を助長してはいけいない。音楽科はある種のアファーマティブアクション（積極的格差是正措置）として、西洋音およびポピュラーミュージック的な「良さや美しさ」は「慣例的概念」でしかないこと、個人が音楽する際には、特定音楽文化における「良さや美しさ」に束縛される必要がないこと、「良さや美しさ」という概念を相対化した先に豊かな音響の肌理が存在することを、声高に主張しなければならない。そして子ども個人の音楽する〈自由〉、すべての人がお互いの音楽表現を認め合うために必要な〈自由の相互承認〉を実質化するために、音楽科はすべての子どもに音楽に対する非他律的態度を獲得させなければならない。音楽に対する非他律的態度は、特定音楽文化を専門的に学ぶことで自然と醸成されるわけではない。むしろ、特定音楽文化についての学習は、「これこそが正しい音楽表現なのだ」という他律的な音楽観を内面化させかねない。したがって、公教育以外の教育に非他律的態度の涵養を期待することは難しいだろう。だからこそ公教育に音楽科教育が必要になる。それこそが、音楽科教育の存在意義である。*2

このように考えている研究者もいることは、本校の音楽科の実践を意味づけてくれるのではないかな。音楽は社会からなくなるものではない。だからこそ、生活と音楽の関わりや出会いが大切になってくるのだ。「音楽の授業が好きだ」と思えるような子どもたちを育てたいという考えのもと、この先も追究していく。

（下田・町田）

*1 クリストファー・スモール、野澤豊一＋西島千尋訳（2011）『ミュージッキング』水声社

*2 長谷川涼（2024）『音楽科教育はなぜ存在しなければならないのか』p219-p 221, 明治図書